氷見市埋蔵文化財調査報告第30冊

森　寺　城　跡

－試掘調査の概要－

2000年３月

氷見市教育委員会

『森寺城跡』　氷見市教育委員会

下記のとおり訂正をお願いいたします。

１４ページ　表１中

６１番と６２番、「元祐通宝（初鋳年１０８６年）」を、「嘉祐通宝（初鋳年１０５６年）」に訂正します。

氷見市埋蔵文化財調査報告第30冊

森　寺　城　跡

－試掘調査の概要－

2000年３月

氷見市教育委員会

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の立地環境……1
Ⅲ　遺構……1
Ⅳ　遺物……9
Ⅴ　まとめ……14

図・表目次

第１図　森寺城跡と周辺の城跡……2
第２図　森寺城跡平面図 ……3
第３図　試掘トレンチ配置図……5
第４図　試掘トレンチ実測図（１） ……6
第５図　試掘トレンチ実測図（２） ……7
第６図　試掘トレンチ実測図（３） ……8
第７図　遺物実測図（１） ……10
第８図　遺物実測図（２） ……11
第９図　遺物実測図（３） ……12
第１表　寺坂出土銅銭一覧 ……14
図版（１）
図版（２）
図版（３）

例　　言

1　本書は富山県氷見市森寺に所在する森寺城跡について平成８・９年度に氷見市教育委員会が実施した試掘調査の概要を報告するものである。

2　調査は氷見市教育委員会が主体となり、平成９年３月25日～同年３月31日（延べ３日間）及び平成９年９月17日～同年12月19日（延べ14日間）に実施した。

3　調査事務局は氷見市教育委員会生涯学習課におき、調査事務は主事小谷超が担当した。

4　調査は氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究が担当した。

5　調査全体にわたって高岡徹氏から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。

6　本書の編集は大野が担当した。

7　調査参加者は以下のとおり

現地作業：沢井正雄・沢井とき・中村かず子・坂田かずい・栗一枝・中村すみ子・東海舞子・松原秀子・田口久仁子・向春子・坂口愛子（氷見市シルバー人材センター）

整理作業：三矢恵京・日南静・嵩尾朋昭

砂田普司・田中洋一・猪狩俊哉（富山大学人文学部考古学専攻学生）

8　調査及び本書の作成について以下の方々からご協力を得た。記して感謝申し上げる。

尋湯山会・天理大学文学部歴史文化学科

西井龍儀・宮田進一・山本忠尚・栗山雅夫

Ⅰ　調査に至る経緯

森寺城跡は昭和48年１月30日に氷見市指定史跡となり、その後森林公園として一部が整備され現在に至っている。地元住民による草刈りなどの活動があり、また近年ではボランテイアで草刈りや道案内、さらには勉強会を行う尋湯山会が結成され、市内で最も積極的に活用されている史跡といえる。

しかし整備が農林・観光部局により行われたこと、城全体の縄張りがはっきりしないこと、史跡指定が城の中心部のみにとどまることなどの問題点もあった。

氷見市教育委員会ではこうした問題点に対処する基礎作業として、平成７年度から地元の協力を得て森寺城跡の調査を実施することになり、その一環として平成８年度から３カ年計画で測量調査を実施した。また城館研究者である高岡徹氏にお願いして、縄張りの調査も並行して行った。これらの作業の過程で、城の構造をより明らかにするために、一部発掘調査の必要性が生じてきた。そこで平成８・９年度に搦手口地区、三角点地区、本丸・二の丸地区の三カ所を対象に試掘調査を実施した。なお、平成10年度には天理大学（代表：山本忠尚教授）のチームにより、二の丸のレーダー探査を実施したが、残念ながら地質の関係から明確な成果を得ることができなかった。

Ⅱ　遺跡の立地環境

森寺城跡は氷見市北部を流れる阿尾川中流左岸の丘陵上に立地する。城跡の範囲は南北約1.1km、東西約0.4kmにわたる。中心部の標高は約160ｍである。城跡の西側を通る阿尾川に沿った荒山街道は、越中と能登をつなぐ重要な街道のひとつであり、その下流には阿尾城跡が築かれ、周囲にはさらに阿尾島尾山砦跡、八代城跡、稲積城跡、海老瀬城跡などの山城が所在する。

森寺城は中世の史料には湯山城の名前で登場する。能登畠山氏によって16世紀初め頃に築かれたと推定され、その後上杉謙信、佐々成政の支城となり、成政が羽柴秀吉に降伏した天正13年頃に廃城となったと思われる。

Ⅲ　遺構

搦手口地区（第３図左上、第４図）

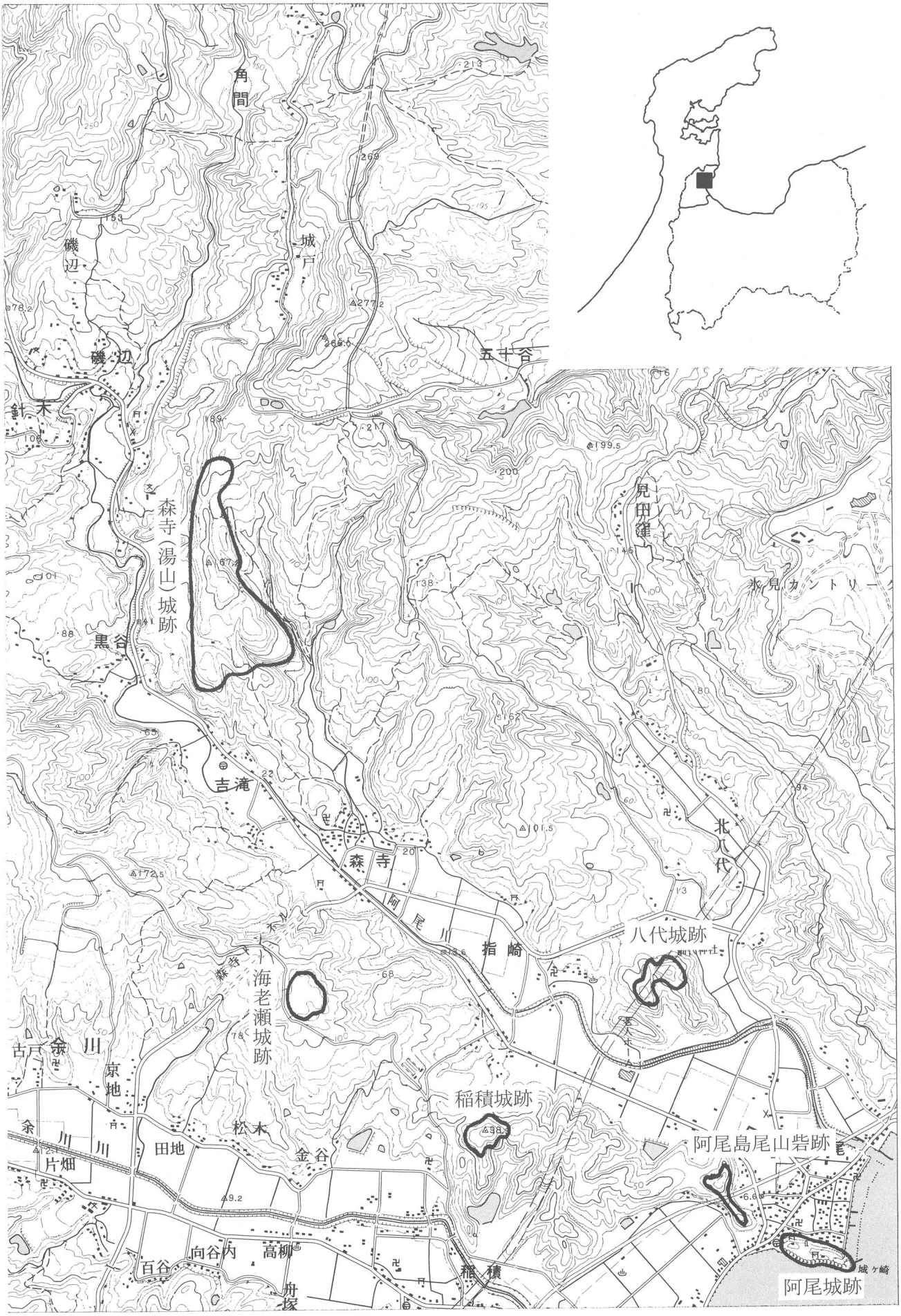
本地区は森寺城跡の北側出入口にあたる。幅約35ｍの尾根の西側は急斜面、東側は谷が入り込む地形であり、尾根上には二つの堀切と土塁を組み合わせた防御施設が造られている。試掘調査は堀切の形態の確認を目的とし、堀切１に三カ所、堀切２に二カ所のトレンチを設定した。

堀切１：現状では堀切底部と土塁上部の高低差は約２ｍであるが、調査の結果堀切はさらに1.5ｍほどＶ字型に掘り込まれていたことが確認できた。

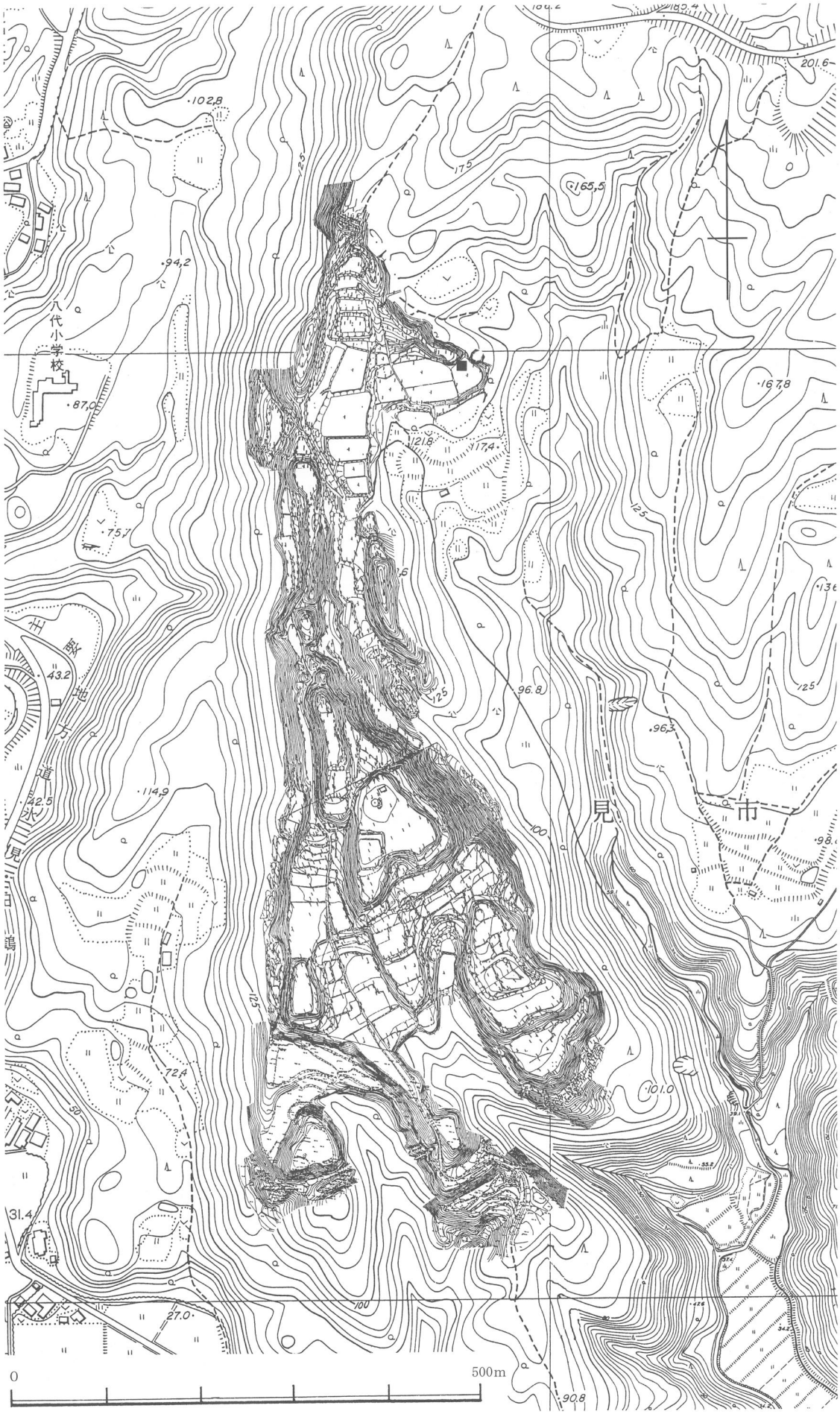
堀切２：Ⅱトレンチでは堀切１と同様Ｖ字型の断面を呈するが、西側のⅠトレンチでは箱型の底部を呈する。堀切の長さを確認するためにⅠトレンチに直交するサブトレンチを設けたところ、南側の土塁裾まで堀切が伸びていることが確認され、城に出入りする山道がこの部分においてかなり屈曲していたことが判明した。

三角点地区（第３図右上、第５図）

本地区は森寺城跡のほぼ中央に位置し、城内の最高地点である。東西約20ｍ、南北約70ｍの郭の北端にＬ字型の土塁が設けられている。この土塁とその内側の郭の状況を確認するためトレンチを設定した。なお、本ト



第1図　森寺城跡と周辺の城跡（1/25000）



第2図　森寺城跡平面図（1/6000）■は銅銭出土地点

レンチは表土の除去を行ったのみである。

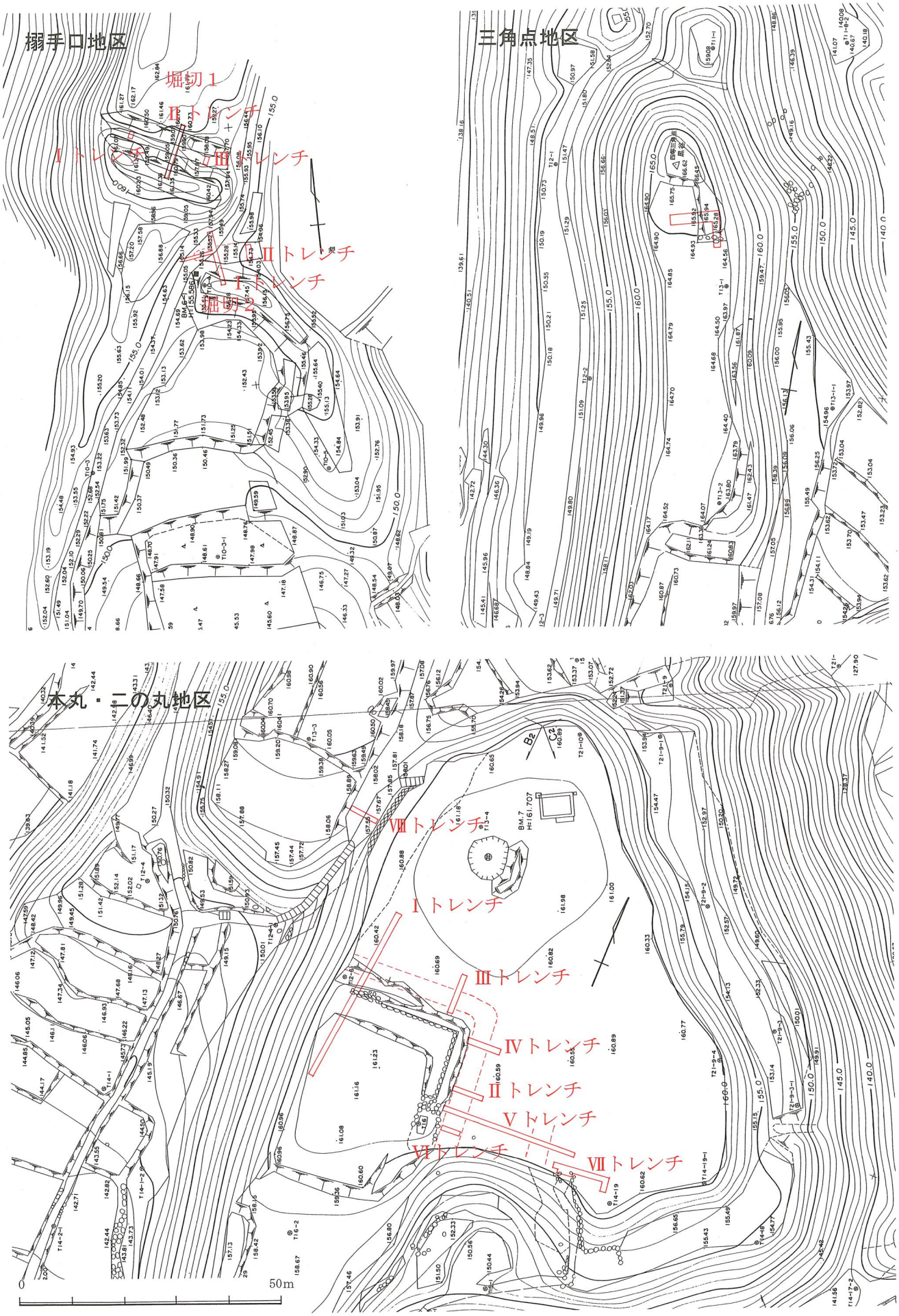
土塁内側の部分では、15～20cmほどの石が２点確認できたが、石垣石や建物の礎石には小さく、栗石とすれば大きいものであり、これらとは別の性格を有するものと思われる。土塁南側には調査前から石垣石やその転石が現れており、試掘調査では土塁裾において栗石の転石とみられる拳大の石が多数確認された（第５図平面図網点部分）。測量調査では本地区の東側斜面下にかなりの数の石垣石が転落しているのが確認され、本地区の土塁にも石垣が構築されていたことが予測されるが、試掘調査の結果からは石垣は土塁南・東斜面に構築され、内側にはなかったと推定される。なお、土塁北側の斜面にも表面観察で石垣石がひとつ認められる。石垣は土塁北側にもめぐっていた可能性がある。

本丸・二の丸地区（第３図下、第５・６図）

本地区の調査は本丸と二の丸を仕切る土塁の構造を確認する目的でⅠトレンチを設定したのであるが、土塁外側で空堀を確認したため、この空堀の経路を確認する目的でⅡ～Ⅵトレンチを追加設定した。また、二の丸南北の出入口の構造を調査する目的でⅦ・Ⅷトレンチを設定した。なお、都合でⅡトレンチは表土を掘削したのみ、Ⅴ・Ⅶ・Ⅷトレンチについては次年度以降に調査を継続することになったため、今回の報告から省いた。

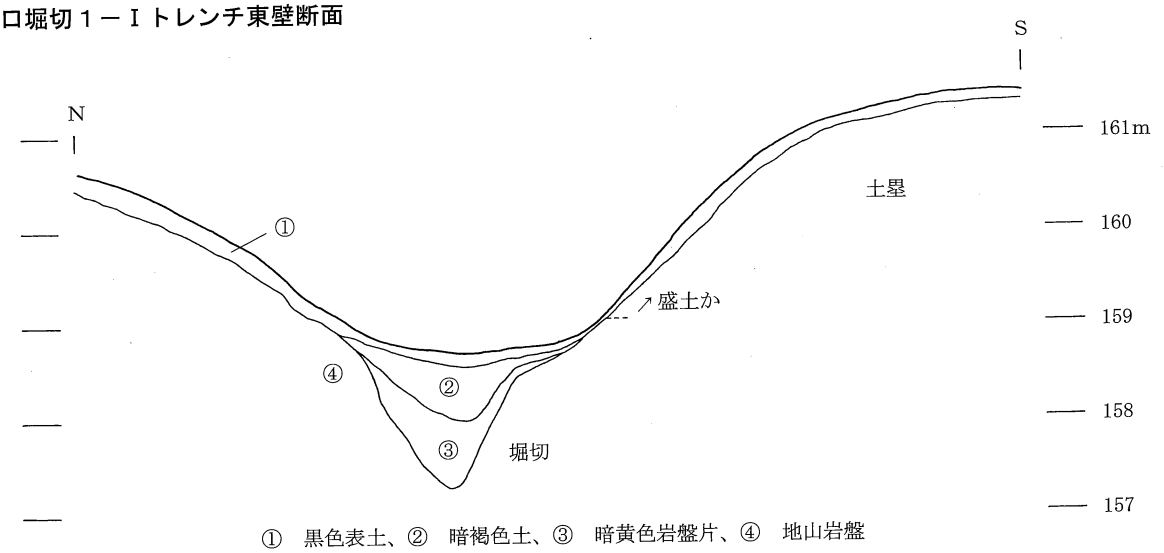
まず調査の結果を基に土塁構築過程を推定してみる（第６図）。整地面に基礎となる石垣石を設置したあと、７層黒色土で石垣裏側を斜めに埋める。次に土塁内側に土留めを目的としたと思われる石組みを設置し、６層黄褐色土、５層黒色土、４層黄褐色土と、交互に積み重ねる。この作業と並行して石垣石の積み上げと栗石込めが行われたのであろう。３層暗褐色土の様相から、内側の石組みは結果として土塁の中に埋め込まれ、見えなくなっていたと思われる。石垣石転石は土塁前に散乱し、さらに試掘調査で確認された空堀の中でも確認された。これらのことから、土塁石垣は３段もしくは４段に積まれていたと推定され、土塁の高さは２m近いものであったと思われる。

新たに確認した空堀は、Ⅰトレンチでは土塁との間に約３mの犬走り状のテラスをおいて、幅約４m、深さ約1.6mであった。Ⅲ・Ⅳ・Ⅵトレンチでは上部の攪乱が激しく、空堀の下半を確認したのみである。前二者では底までの掘削は行っていない。これらの調査から空堀は土塁の外側をＬ字状にめぐると推定される。また犬走り状のテラスは土塁北側のみで東側では空堀が土塁に接してあるようである。なお、Ⅴトレンチの東側でも空堀状の落ち込みが確認されている。これについては次年度以降に明らかにしていきたい。



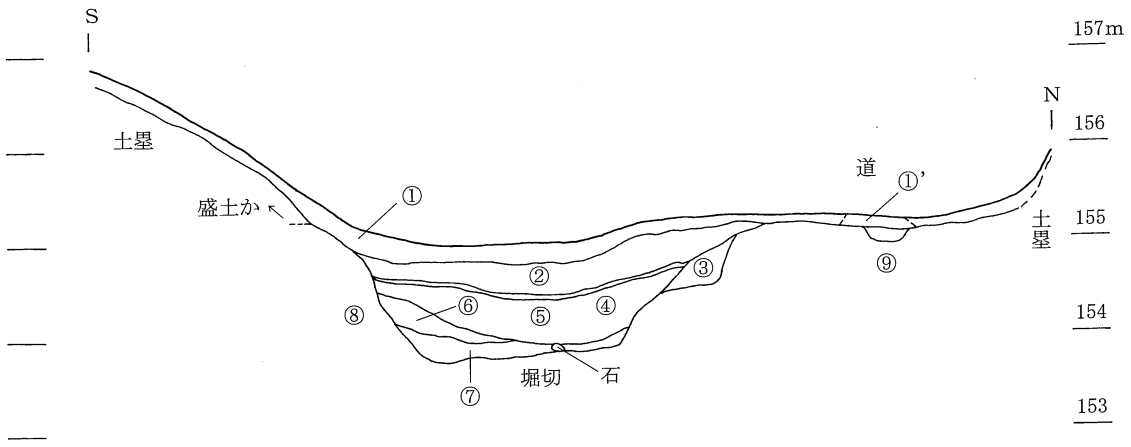
第3図　試掘調査トレンチ配置図（1/1000）

搦手口堀切１－Ⅰトレンチ東壁断面



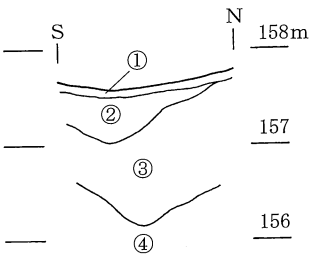
① 黒色表土、② 暗褐色土、③ 暗黄色岩盤片、④ 地山岩盤

搦手口堀切２－Ⅰトレンチ西壁断面



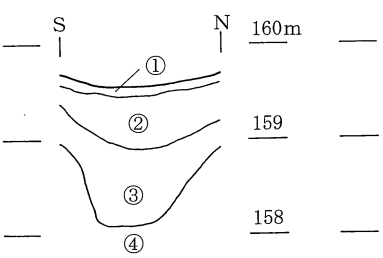
① 黒色表土、①' 黒色表土(砂利混り)、② 暗褐色土、③ 黒色土(炭混り)、
④ 暗褐色土(有機質混り)、⑤褐色土、⑥暗黄色岩盤片、⑦ 暗黄色岩盤片(黒色土混り)
⑧ 地山岩盤、⑨ 黒色土

搦手口堀切１－Ⅲトレンチ西壁断面



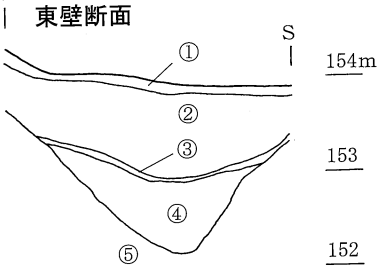
① 黒色表土
② 暗褐色土
③ 暗黄色岩盤片
④ 地山岩盤

搦手口堀切１－Ⅰトレンチ西壁断面



① 黒色表土
② 暗褐色土
③ 暗黄色岩盤片
④ 地山岩盤

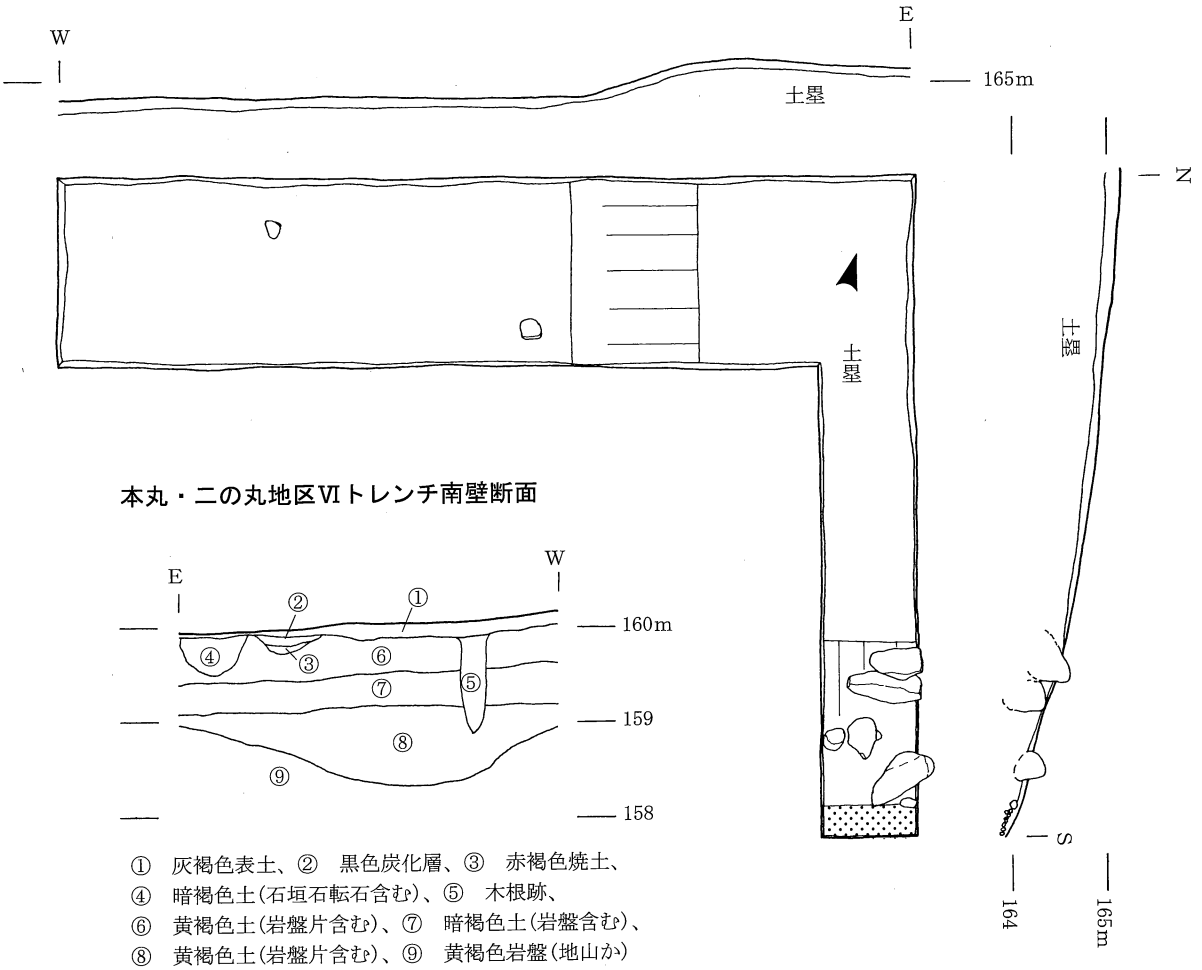
搦手口堀切２－Ⅱトレンチ東壁断面



① 黒色表土
② 褐色土
③ 暗黄色岩盤片(有機質含む)
④ 暗黄色岩盤方
⑤ 地山岩盤

第4図 試掘トレンチ実測図（1） S＝1/80

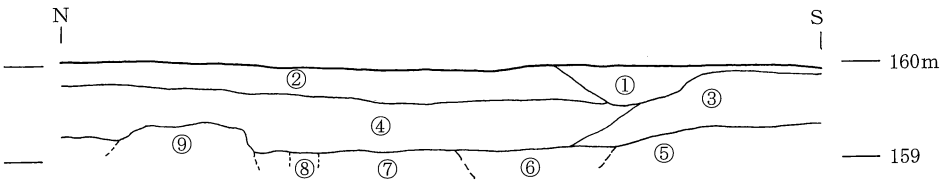
三角点地区トレンチ平面図および北壁・東壁断面



本丸・二の丸地区Ⅵトレンチ南壁断面

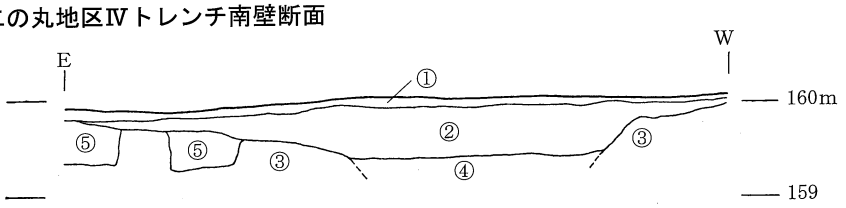
① 灰褐色表土、② 黒色炭化層、③ 赤褐色焼土、
④ 暗褐色土(石垣石転石含む)、⑤ 木根跡、
⑥ 黄褐色土(岩盤片含む)、⑦ 暗褐色土(岩盤含む)、
⑧ 黄褐色土(岩盤片含む)、⑨ 黄褐色岩盤(地山か)

本丸・二の丸地区Ⅲトレンチ東壁断面



① 暗褐色表土(カクラン)、② 暗褐色表土、③ 赤褐色土(岩盤片多く含む)、
④ 暗褐色土(岩盤片少し含む)、⑤ 黄褐色岩盤、⑥ 暗褐色粘質土(炭混り)、
⑦ 赤褐色粘質土、⑧ 暗褐色土、⑨ 黄褐色岩盤片

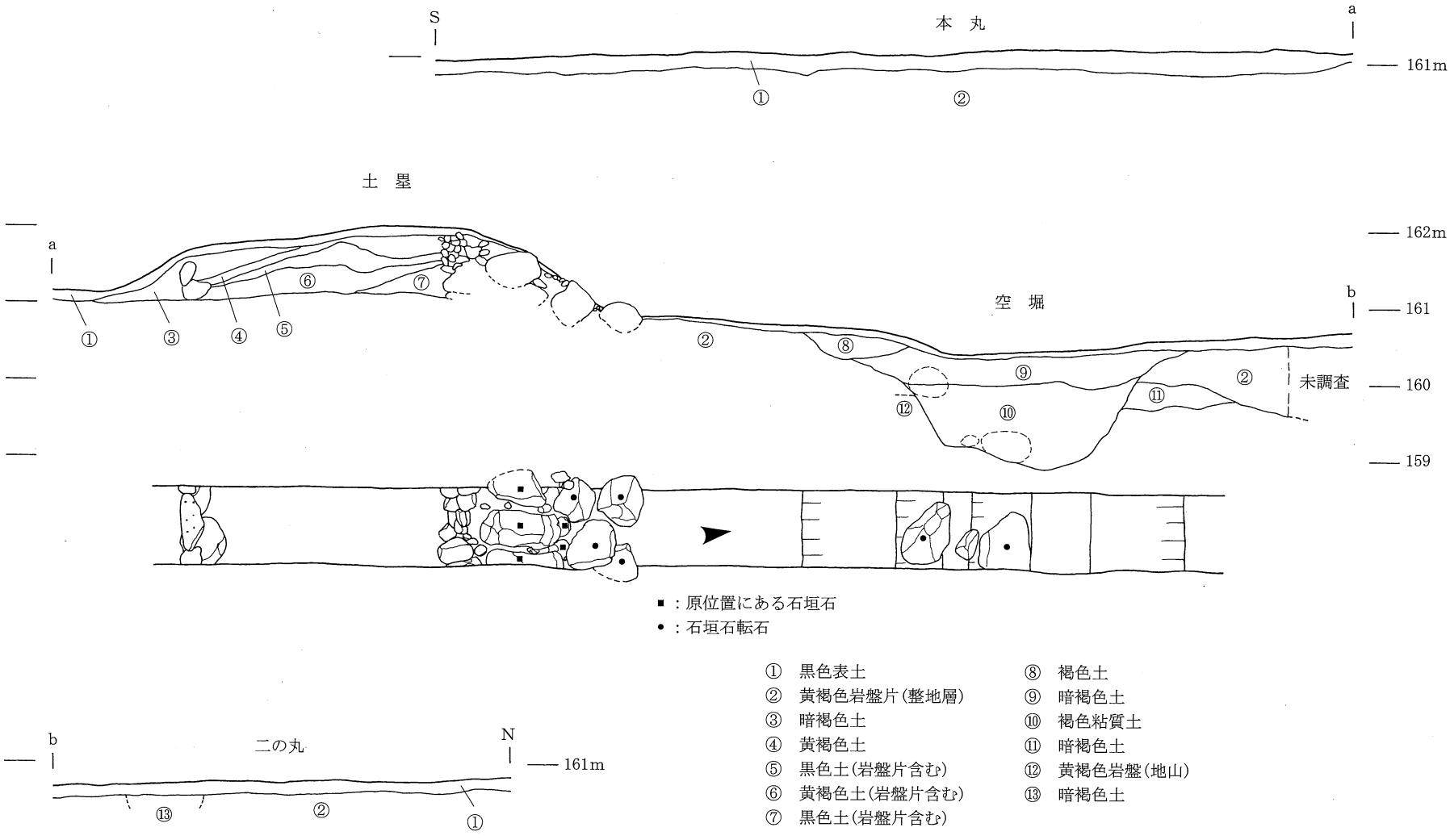
本丸・二の丸地区Ⅳトレンチ南壁断面



① 暗褐色表土、② 褐色粘質土、③ 黄褐色岩盤片(整地層か)、
④ 暗褐色粘質土、⑤ 褐色土(岩盤片含む、カクランか)

第5図 試掘トレンチ実測図 (2) S＝1/80

本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ西壁断面および一部平面図



① 黒色表土
② 黄褐色岩盤片(整地層)
③ 暗褐色土
④ 黄褐色土
⑤ 黒色土(岩盤片含む)
⑥ 黄褐色土(岩盤片含む)
⑦ 黒色土(岩盤片含む)
⑧ 褐色土
⑨ 暗褐色土
⑩ 褐色粘質土
⑪ 暗褐色土
⑫ 黄褐色岩盤(地山)
⑬ 暗褐色土

第6図　試掘トレンチ実測図（3）　S＝1/80

Ⅳ　遺物

出土遺物を図７～９に図示した。中世土師器皿はすべて手づくねのものである。

１～６は本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ表土からの出土である。１は土師器小皿であり、口径13cm、体部はゆるやかに立ち上がり端部が外反する。内面と体部外面の調整は不明であるが、口縁端部には横ナデ調整を確認でき、油煙痕が残る。16世紀のものであろう。２は伊万里碗であり、口径12cm、器高6.8cm、高台径5.2cmを測る。17世紀後半から18世紀のものである。３は近世陶器碗であり、内面と体部外面に釉を施す。４は染付皿であり、底径は6.5cmを測る。16世紀のものであろう。５は白磁碗である。口径は不明であるが、16世紀のものと思われる。６は鉄製品であり、残存長4.6cm、最大幅1.2cm、最大厚1.1cmを測る。断面が方形であり鉄釘の可能性がある。

７から19は本丸・二の丸地区Ⅱトレンチ表土出土の土師器小皿である。７は口径11cmを測り、口縁はゆるやかに外反する。内外面とも調整は不明である。８は口径11cm、器高2.5cm、底径５cmを測り、底部からゆるやかに体部が立ち上がる。16世紀末頃のものであろう。９は口径12.4cmを測るが、内外面とも調整は不明である。16世紀前半のものであろう。10は口径13cmを測る。口縁は直線的に開くが、内外面とも調整は不明である。11は口径14cmを測り、口縁は直線的に開く。内面には横ナデ調整を施すが、外面の調整は不明である。16世紀中葉から後半頃のものであろう。12は口径15cmを測り、内外面とも横ナデ調整を施す。16世紀中葉から後半のものであろう。13は口径20cmを測る。体部は丸みを帯び、口縁部は外反して開く。内面及び口縁部外面には横ナデ調整を施し、外面には煤が付着する。16世紀初め頃のものであろう。14は口径11cm、器高1.9cm、底径4.6cmを測る。口縁は直線的に開くが、内外面とも調整は不明である。15は口径11cmを測り、口縁は直線的に開く。内外面とも調整は不明である。16は口径12cm、器高1.7cm、底径６cmを測る。口線は直線的に開き、端部を面取りする。内面には横ナデ調整を施すが、外面の調整は不明である。17は口径12cmを測る。体部の器壁はやや厚く、口縁端部は丸くおさめる。16世紀中葉から後半頃のものであろう。18は口径15cmを測る。口縁はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。内面及び口縁部外面には横ナデ調整を施す。16世紀のものであろう。19は口径13cmを測り、口縁は直線的に開く。内面の調整は不明であるが、外面はナデ調整を施す。16世紀中葉から後半頃のものであろう。

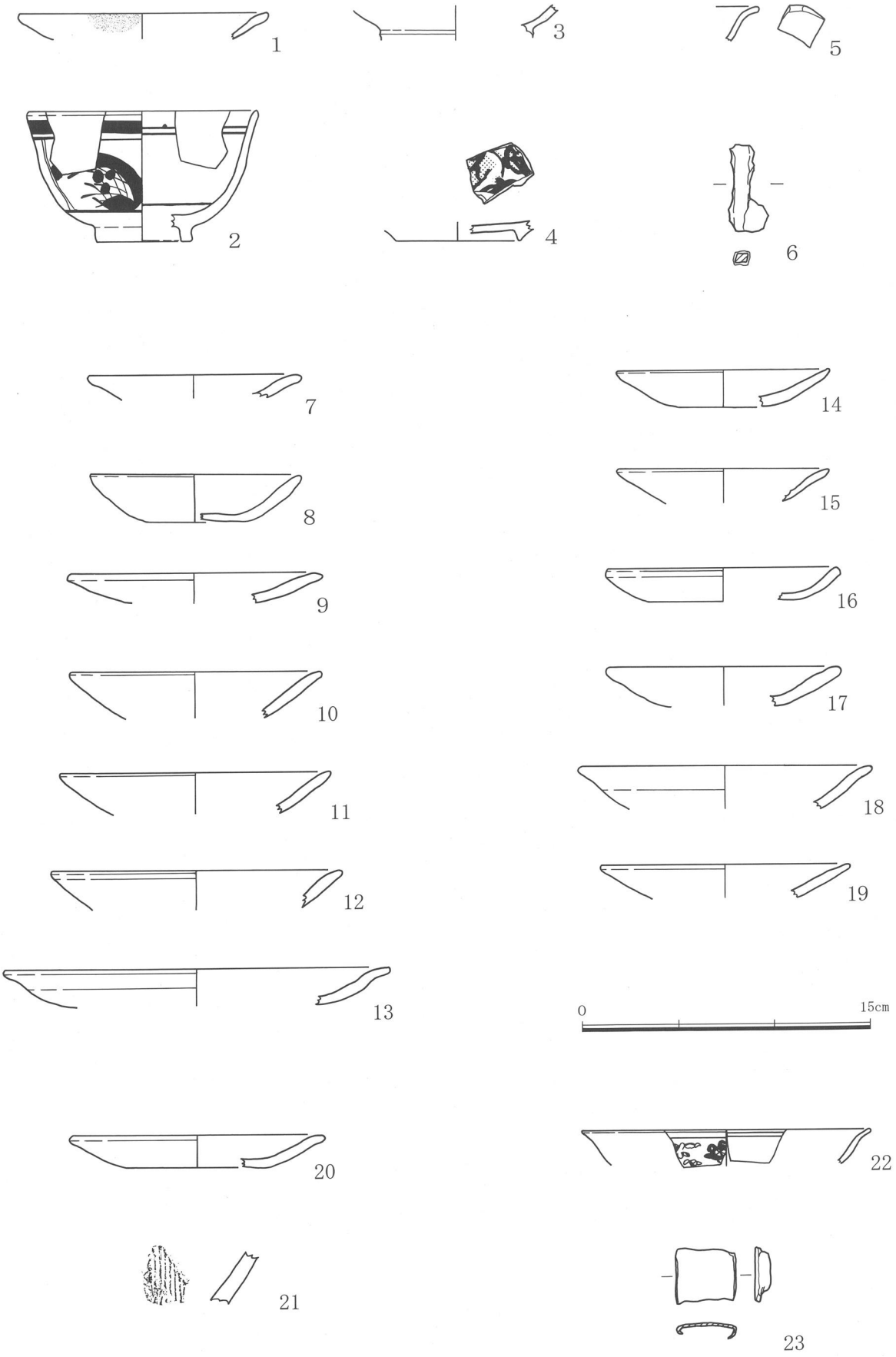
20～22は本丸・二の丸地区Ⅲトレンチ攪乱層出土のものである。20は土師器小皿であり、口径13cm、器高1.7cm、底径6.6cmを測る。内外面とも調整は不明である。21は越中瀬戸すり鉢である。内外にはおろし目を確認でき、内外面とも釉を施す。22は染付皿であり、口径は15cmを測る。

23は三角点地区出土の銅製品。残存長2.9cm、最大幅3.2cm、最大厚0.8cmを測る。

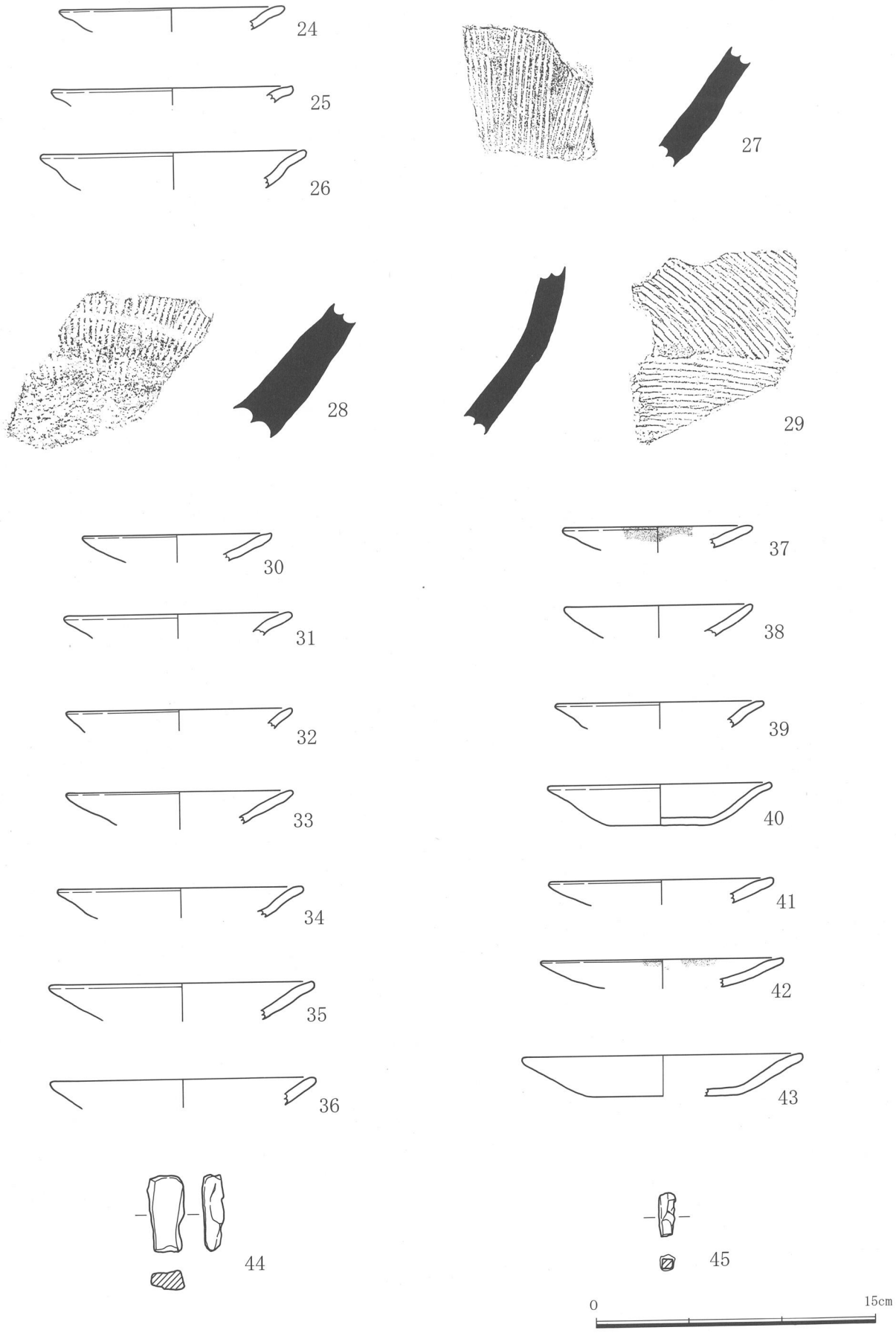
24から26は搦手口地区堀切内出土の土師器小皿である。24は堀切１－Ⅱトレンチ出土で口径11.6cmを測る。口縁端部は外反して開き、内外面とも横ナデ調整を施す。25は堀切２－Ⅱトレンチ出土で口径13cmを測る。口縁端部はつまみ上げて成形し、内外面とも横ナデ調整を施す。26も堀切２－Ⅱ出土で口径14cmを測る。体部は丸みを帯び、口縁は外反して開く。内面及び口縁部外面に横ナデ調整を施す。

27は縄張り調査中城跡南側野崎屋敷への分岐点で表面採集した珠洲すり鉢である。内外面ともロクロナデ調整を施し、内面には９条を一単位としたおろし目を確認できる。

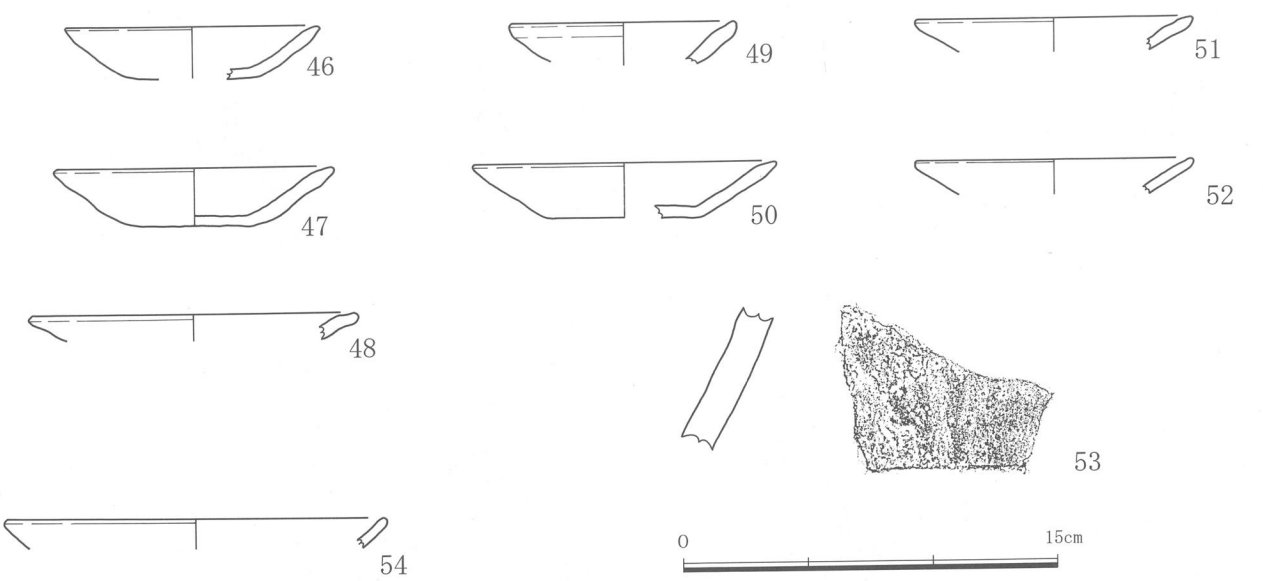
28・29は二の丸で過去に採集されていた資料である。28は珠洲すり鉢であり、内外面ともロクロナデ調整を施し、内面にはおろし目を確認できる。ただし内面下半は摩滅が激しく、おろし目を確認できない。29は珠洲甕であり、外面には平行叩き痕確認でき、内面は当て具痕をナデ消す。破片中央には粘土接合痕を確認でき、

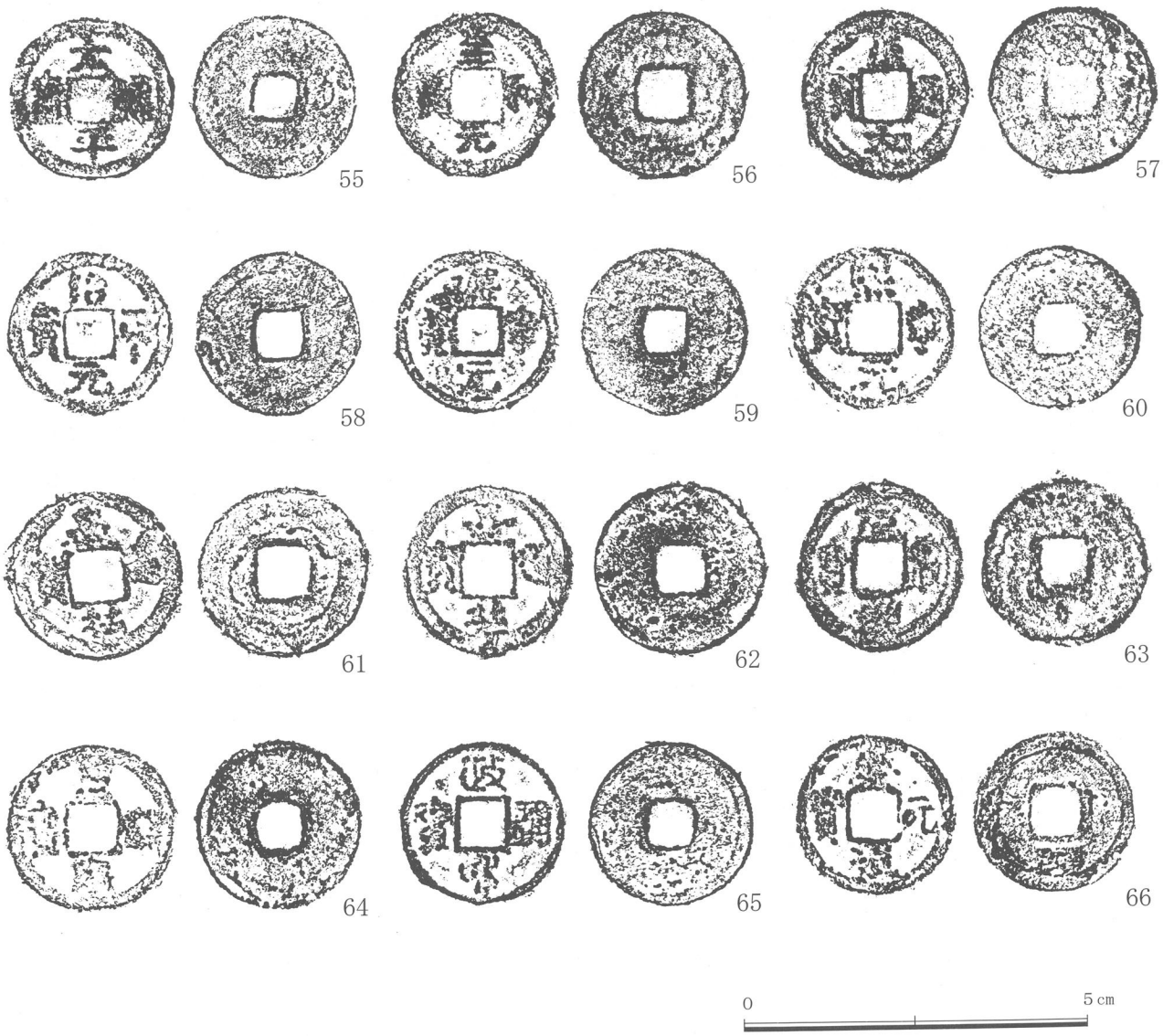


第7図 遺物実測図（1）1/3



第8図　遺物実測図（2）1/3





第9図　遺物実測図（3）1/3　55～66は1/1

叩きの角度もそこを境として変化する。

30から43は本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ空堀埋土から出土した土師器小皿である。30は口径10cmを測り、口縁は直線的に開き、端部をつまみ上げる。内外面とも調整は不明である。31は口径12cmを測り、口縁は外反し、端部は丸くおさめる。16世紀末のものであろう。32は口径12cmを測り、内外面とも横ナデ調整を施す。33は口径12cmを測り、体部は直線的に開くが、内外面とも調整は不明である。34は口径13cmを測り、口縁部はやや外反気味に開き、端部上面を平らに成形する。内面及び口縁部外面に横ナデ調整を施す。35は口径14cmを測り、口縁は直線的に開く。内面及び口縁部外面に横ナデ調整を施す。36は口径14cmを測り、内外面とも横ナデ調整を施す。16世紀末のものであろう。37は口径10cmを測り、内外面とも調整は不明であるが、油煙痕が残る。38は口径10cmを測り、口縁は直線的に開き、端部は丸くおさめる。内外面とも調整は不明である。39は口径11cmを測り、口縁はゆるやかに外反し、端部は軽くつまみ上げる。16世紀末のものであろう。40は口径12cm、器高22cm、底径7.3cmを測り、体部内面及び口縁部外面は横ナデ調整、底部内面及び底・体部外面は不定方向のナデ調整を施す。41は口径13cmを測り、口縁は外反して開き、内外面とも横ナデ調整を施す。42は口径13cmを測り、口縁部の外面に横ナデ調整を施すが、他の部分の調整は不明である。口縁部には油煙痕が残る。43は口径13cm、器高2.2cm、底径7.6cmを測る。体・口縁部内面は横ナデ調整、底部内面には不定方向のナデ調整を施す。16世紀末のものであろう。

44は同じくⅠトレンチ空堀埋土出土の性格不明鉄製品である。最大長4.1cm、最大幅2.0cm、最大厚1.2cmを測る。

45は本丸・二の丸地区Ⅱトレンチ表土出土鉄製品である。残存長2.3cm、最大幅0.9cm、最大厚0.9cmを測る。断面が方形であり針釘の可能性が高い。

46から52は本丸・二の丸地区Ⅲトレンチ攪乱層出土の土師器小皿である。46は口径10cmを測り、口縁は直線的に開き、端部を軽く面とりする。16世紀末のものであろう。47は口径11cm、器高2.3cm、底径４cmを測る。内外面とも調整は不明である。16世紀末のものであろう。48は口径13cmを測り、口縁は外反して開き、端部を軽く面とりする。内外面とも横ナデ調整を施す。49は口径９cmを測り、口縁部内外面には横ナデ調整を施すが、体部内外面の調整は不明である。50は口径12cm、器高2.2cm、底径5.4cmを測る。口縁は平らな底部から角度をもって立ち上がり、直線的に開く。口縁部外面には横ナデ調整、底部内面には不定方向のナデ調整を施す。16世紀末のものであろう。51は口径11cmを測り、口縁は外反気味に開き、端部をつまみ上げる。52は口径11cmを測り、口縁は直線的に開き、端部をつまみ上げる。

53は同じくⅢトレンチ攪乱層出土の越前甕である。内面にはロクロナデを施し、外面には部分的に自然釉が付着する。

54は本丸・二の丸地区Ⅳトレンチ攪乱層出土の近世陶器皿であり、口径は15cm、内面には緑灰色、外面には灰黄色の釉を施す。

55から66は、大正頃に城内北側の小字寺坂地内（第２図■印の地点）で、尋湯山会会員坂井源吾氏の父信義氏（明治38年生）が水田の畦を修復中に偶然発見した銅銭である。容器のようなものはなく、紐のようなもので束ねてあったがほとんどは腐食しており、状態の良い12枚だけを持ち帰ったという。

表１　寺坂出土銅銭一覧

番　号	銭　貨　名	直径(cm)	重量(g)	初　鋳　年	王　朝　名
５５	大平通宝	２．４	２．８	９７６	北　宋
５６	至和元宝	２．４	３．１	１０５４	北　宋
５７	至和通宝	２．４	３．１	１０５４	北　宋
５８	治平元宝	２．４	２．９	１０６４	北　宋
５９	熙寧元宝	２．４	３．３	１０６８	北　宋
６０	熙寧元宝	２．４	３．２	１０６８	北　宋
６１	元祐通宝	２．５	３．３	１０８６	北　宋
６２	元祐通宝	２．５	４．３	１０８６	北　宋
６３	元符通宝	２．４	３．０	１０９８	北　宋
６４	聖宋通宝	２．４	３．３	１１０１	北　宋
６５	政和通宝	２．４	２．６	１１１１	北　宋
６６	慶元通宝	２．４	２．９	１１９５	南　宋

Ⅴ　まとめ

史料による推定では森寺城跡が築城されたのは16世紀初め頃とされるが、採集資料に珠洲があり、15世紀頃から何らかの土地利用があったと思われる。

搦手口地区では、堀切が見かけよりもさらに深く、防御が堅いことが明らかになった。また、堀切から出土した遺物には16世紀初め頃のものも含まれており、この部分の遺構が森寺城初期からのものである可能性が高まった。

三角点地区では明確な遺構・遺物は確認できなかったが、この部分の土塁にも石垣が造られていたことが明らかになった。

本丸・二の丸地区では石垣の構造、空堀の存在が明らかになった。土塁は石垣の構築と連動して築かれ、石垣は３～４段の高さに積まれていたと推定される。また、空堀埋土の中にも石垣石があることから、石垣の破却と空堀の埋め立ては同時に行われたと推定される。なお、空堀埋土内から出土した遺物は16世紀末の資料が多い。

遺物は土師器皿の他に、中国製の白磁や染付（青花）、越前、鉄釘などがあり、城内でもある程度の居住が行われていたと推定される。

二の丸では新たな空堀の存在や、遺構の存在が確認されている。これらの調査は機会を改めて行う予定である。

1. 搦手口堀切１と土塁(北から)

2. 搦手口堀切２と土塁(北から)

3. 搦手口内側の様子(南から)

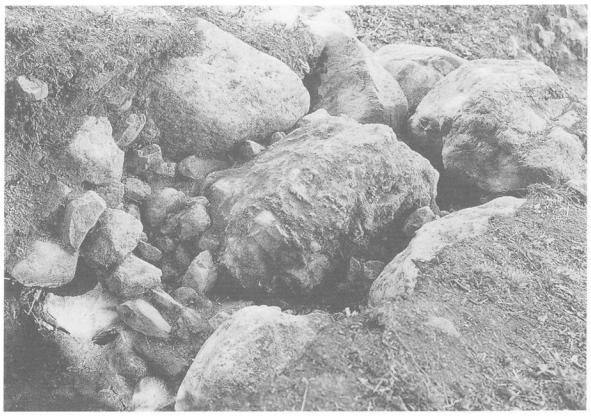
4. 搦手口堀切１－Ⅱトレンチ断面(南から)

5. 搦手口堀切２－Ⅰトレンチ堀切(南から)

6. 三角点地区土塁と石垣(南側から)

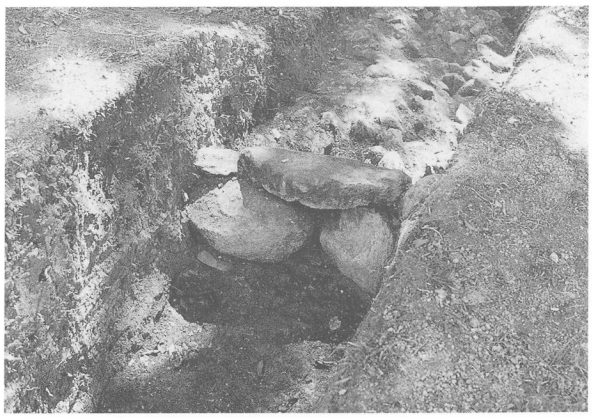
図版二

1. 三角点地区石垣の様子(西から)

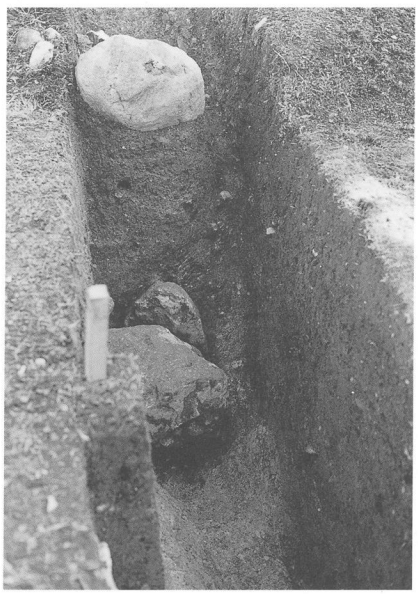


2. 本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ石垣の様子(南から)

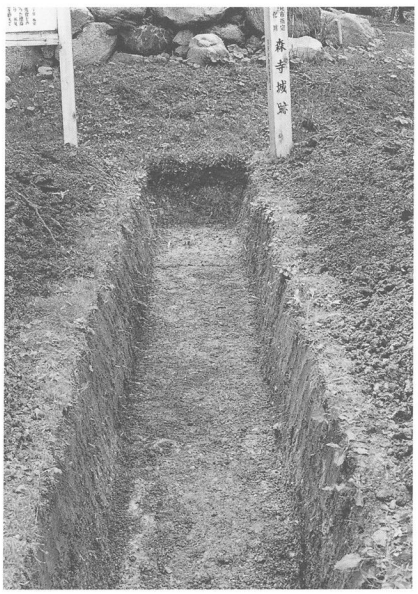
3. 本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ土塁断面(東から)



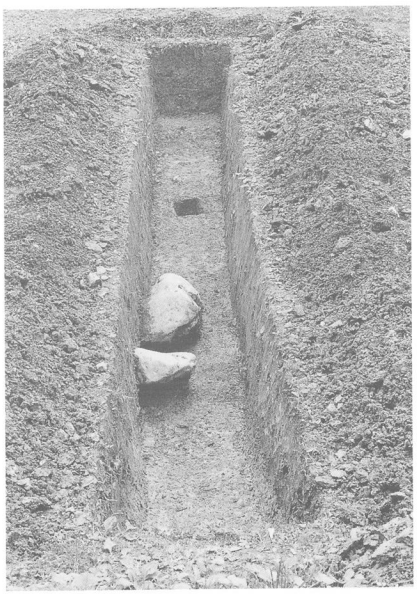
4. 本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ土塁石組(北から)



5. 本丸・二の丸地区Ⅰトレンチ空堀の様子(北から)



6. 本丸・二の丸地区Ⅳトレンチ(東から)



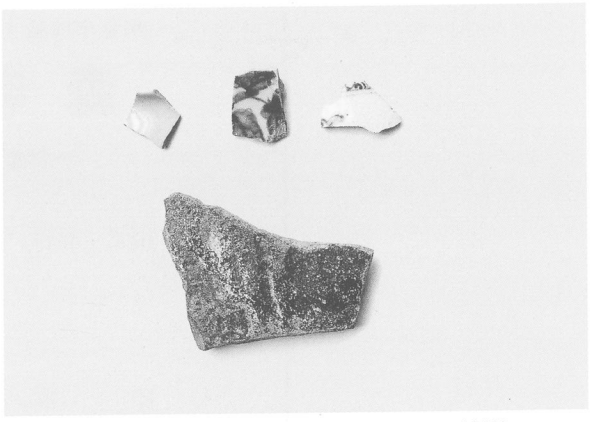
1. 本丸・二の丸地区Ⅲトレンチ(南から)

2. 本丸・二の丸地区Ⅴトレンチ東側
空堀とみられる落ち込み(東から)

3. 本丸・二の丸地区Ⅵトレンチ(北から)

4. 本丸・二の丸地区Ⅵトレンチ(北から)

5. 作業風景(三角点地区)



6. 出土陶磁器(上左：白磁、上中右：染付、下：越前)

報告書抄録

ふりがな	もりでらじょうせき					
書名	森寺城跡					
副書名	試掘調査の概要					
巻次						
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第30冊					
編著者名	大野究					
編集機関	氷見市教育委員会					
所在地	〒935-0016　富山県氷見市本町4番9号　TEL0766(74)8215					
発行年月日	2000年3月31日					
所収遺跡名	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯　東緯	調査期間	調査面積	調査原因
森寺城跡	富山県 氷見市 森寺	16205019	36°　136° 54′　57′ 30″　45″	19970325 〜 19970331 19970917 〜 19971219	175㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
森寺城跡	城館	室町時代 〜 安土桃山時代	堀切 石垣 土塁 空堀	土師器 珠洲 白磁 染付 越前	県内中世城館では 唯一本格的な石垣 をもつ	

平成12年３月25日　印刷

平成12年３月31日　発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第30冊

森寺城跡

－試掘調査の概要－

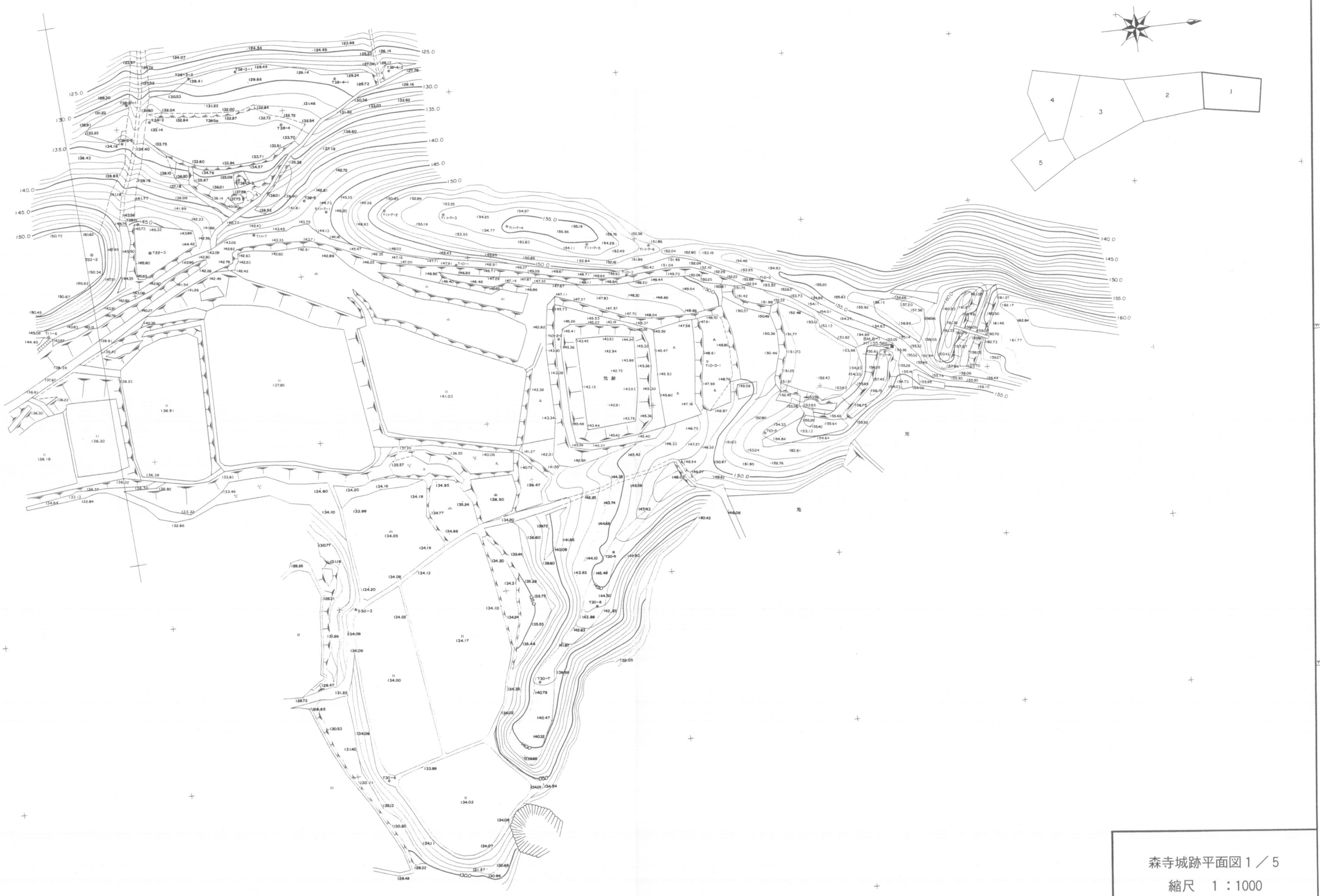
編集・発行／氷見市教育委員会

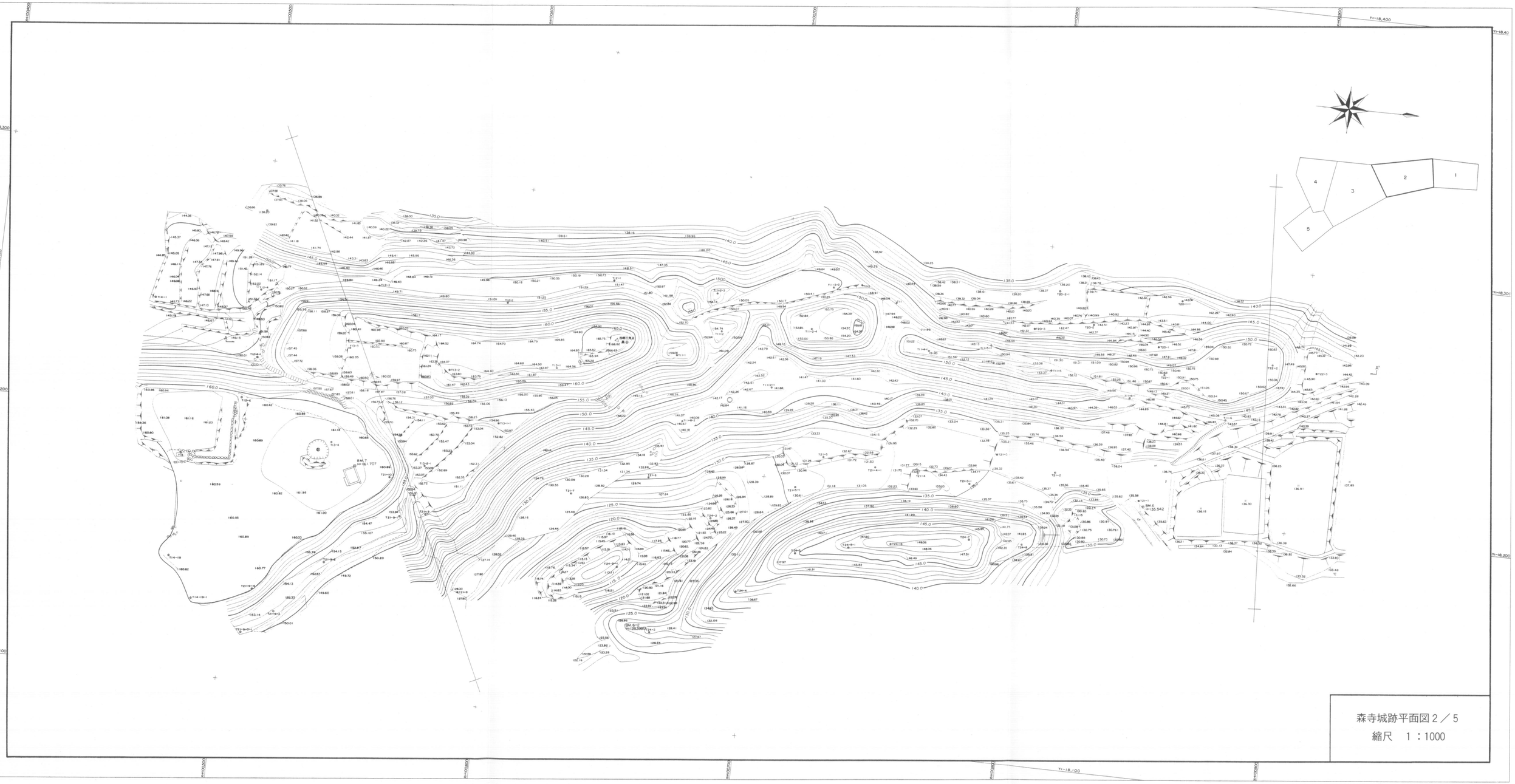
〒935-0016

富山県氷見市本町４番９号

TEL　0766-74-8215

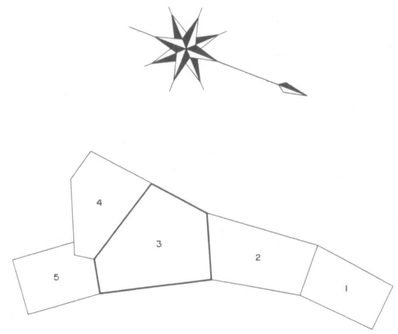
印　　刷／株式会社　ア ヤ ト


1
2
3
4
5
森寺城跡平面図１／５
縮尺　１：1000



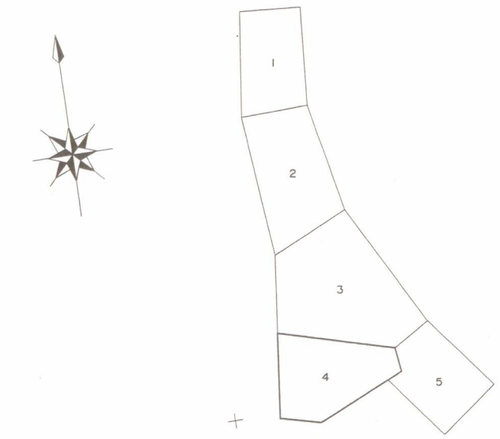
森寺城跡平面図２／５

縮尺　１：1000



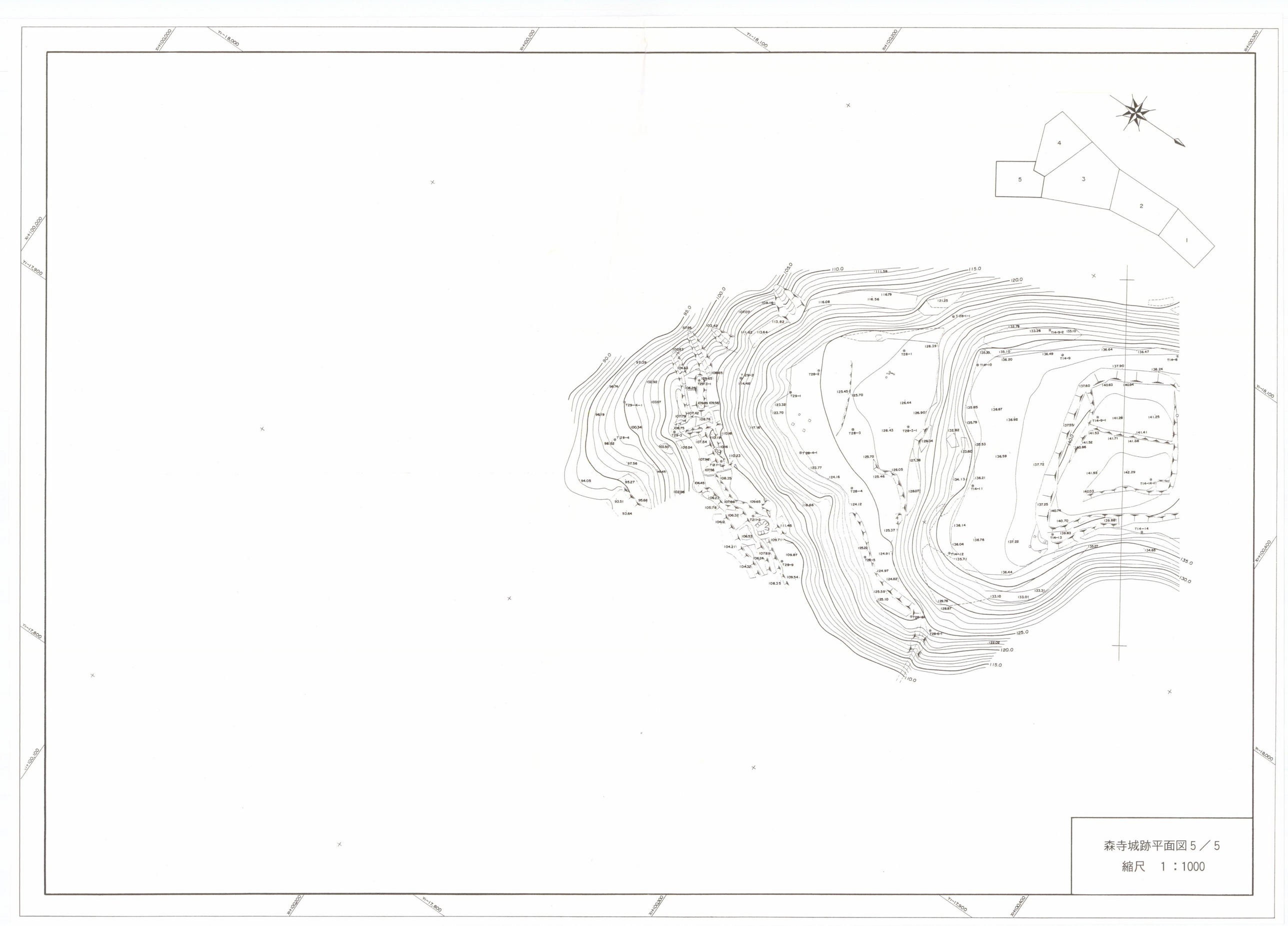
森寺城跡平面図 3／5

縮尺　1：1000



森寺城跡平面図４／５

縮尺　１：1000



森寺城跡平面図５／５

縮尺　１：1000